

# 政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2023 年（令和 5 年）2 月 21 日

一般財団法人 櫻田 會  
理事長 増田 勝彦 殿

研究者 成蹊大学法学部助教  
梅澤 佑介

第 40 回（令和 3 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

政治におけるフィクション —ハロルド・ラスキのプラグマティズム受容—

Fiction in Politics: Harold Laski's Reception of Pragmatism

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

The purpose of this study is to inquire why and how Harold J. Laski, the British political philosopher in the 20th century, adopted the view of 'multiverse' of pragmatism. I researched on this theme by reading not only the works of Laski, but also the works of the political philosophers in 18th-century Britain (David Hume, Adam Smith, Edmund Burke, Jeremy Bentham, etc.) and the ones in 19th-century Germany (Immanuel Kant, G. W. F. Hegel, Karl Marx, etc.). As a result, this study revealed the significance of fictions in political thoughts. For instance, instead of accepting the status quo, to assume the human improvement, T. H. Green had to suppose the metaphysical concept of 'eternal consciousness,' which, to Laski, seemed too monistic for citizens to dare have their own political opinions. That is why Laski adopted the view of 'multiverse,' another fictitious concept from pragmatism. In this way, any kind of political thought includes some fictions or metaphysical assumptions, and we should not ignore this fact. We are not God that see thing-in-itself (noumenon), and this self-consciousness is the key to republican citizenship.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

本研究の目的は、20 世紀イギリスの政治学者ハロルド・ラスキが、いかなる目的と方法においてプラグマティズムを受容し、またその受容がラスキの政治思想に対していかなる意味を持ったのかを考察することである。その研究方法としては、ラスキの政治思想にのみ着目するのではなく、彼の同時代における論敵や思想的先達、場合によっては彼に影響を受けた後の時代の政治学者の著作を射程に含めることにより、プラグマティズムの中でも「多元的宇宙」論というフィクションの採用が政治思想一般に対していかなる含意を有していたのかを検討した。本研究が有する意義としては、価値観が多様化する現代社会において、価値観の共有（あるいは一元的価値観）を基礎としない政治的共同体のあり方の模索の一例として、「多元的宇宙」論を基礎としたラスキの政治思想がきわめて示唆的であることが挙げられる。

※研究経過と結果の概要 （以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる)

本研究期間を通じて、研究費を活用して文献調査を行うことにより、拙著『市民の義務としての〈反乱〉』では射程に含まれていなかった 18 世紀イギリスや 19 世紀ドイツの政治思想とハロルド・ラスキの多元的國家論との関連を考察することができた。

18 世紀初頭のイギリス名誉革命体制を擁護した哲学者デイヴィッド・ヒュームは、共和主義者とジャコバイトの板挟みに遭いながら、黙約としての constitution を守り抜く道を模索した。彼は社会契約論という前時代的なフィクションを否定し、規範(フィクション)に基づき現実が形成されるのではなく、現実が反復される中で徐々に規範性が生じることを論じた。ルソーが否定した文明社会は、このような論理で肯定されることになる。

ヒュームと同じくスコットランド出身の経済学者アダム・スミスは、人間の交換性向から発達した市場経済に規範性を見出す。ヒュームが形而上学的な自然法を否定し、名誉革命体制が体現する慣習の中に一種の「自然」を見出したのに対し、スミスは市場経済に「自然」を見出したのである(「自然的自由の体系」)。このように人間の「自然」(人間本性、human nature)をどこに求めるかをめぐって、17 世紀から 18 世紀のイギリス政治思想は転換を遂げた。「自然」はいわば天上から現実の実践の世界に引きずり降ろされたのである。

19 世紀の前半まで活動した法学者ベンサムも社会契約論をフィクションとして斥ける点では前二者の思想家たちと軌を一にしている。ただし、ベンサムの生涯における思想的発展の中で、イギリス政治思想史にとっても重大な転換が生じる。政治的には保守的だったベンサムは、哲学的急進主義の形成に寄与した民主主義の時期を経て、共和主義に至る。自己の利益を最もよく知るの(少なくとも現在の)自己とは限らないのである。

このような転換は、J・S・ミルの「危ない橋」の例を経て、イギリス観念論者たちがドイツからカントやヘーゲルを輸入する思想的土壌を用意した。(広義の)「ドイツ観念論者」と呼ばれるカントやヘーゲルは、現実が意識の所産であることを説いた。人間はありのままの現実(カントの言う「物自体」)を直接認識しているわけではない。人間の精神のあり方はいくつかの段階を経て発展していく。とすれば、自己の利益を最も知るの(少なくとも現在の)自己であるとする民主主義の想定はやはり幻想となる。このように人間の完成可能性を前提とした政治思想は、イギリスの T・H・グリーンやラスキの政治思想の中に消化され継承されていく。

現状肯定を避けるため、グリーンとラスキはそれぞれ異なるフィクションを自覚的に採用した。一方でグリーンは「永遠意識」という概念を措定し、世界の一元性を形而上学的に担保した。世界には何らかの一元的な完成態が存在し、市民とはその完成態に向けて成長していくべき存在で

ある。他方でラスキはこの一元的世界観を斥け、「多元的宇宙」論を自らの政治思想の基礎に据える。人間の完成態は一元的なものではない。人間の思い描く理想は経験的現実によって規定される面を免れることができないというヘーゲルの想定がここでも維持されているわけであるが、にもかかわらず個々人の経験は「類似」することがある。このような「類似」（「同一」ではない）により、政治的秩序も可能となる。このようにラスキに至るまでの政治思想史は、フィクションが政治思想に対して有しうる含意の重大性を分かりやすく示していると言える。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

なし

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。